

談話マーカ「???'と Face 行為

著者	？ 永湖
雑誌名	言語科学論集
巻	2
ページ	97-108
発行年	1998-11-20
URL	http://hdl.handle.net/10097/30710

談話マーカー「하지만」と Face 行為*

曹 永湖

キーワード：Face 行為、談話マーカー、FTA、Anti-FTA、mitigator

要 旨

従来「하지만」に対する研究は、文レベルの研究に止まっており、談話レベルでの研究はあまり行われていなかった。そこで本論文では、談話の流れの中で pre-starts として用いられる「하지만」の談話上の機能や用法を face 行為の視点から分析を試みた。その結果以下のことがわかった。「하지만」は相手の face を脅かす機能を持つ談話マーカーであるため、公的な場面や社会的関係が上位の場合には用いることができない。また、相手からの FTA に反発する anti-FTA マーカーとしての働きも果たしているとともに、さらに相手の face を脅かす表現を導く働きがある。

0. はじめに

一般に「하지만」は、「Xだ。하지만、Yだ。」のようにXで述べた事柄に対して、反対・弁解・感想・疑問をあらわすYを導く接続詞として用いられる。しかし、「하지만」が、談話マーカーとして機能する場合には、伝統的な接続詞としての分析のみでは説明できない談話上の機能や用法を持っており、それを十分に説明するためには新たな理論が必要である。

本稿では、談話で pre-starts として用いられる「하지만」が、話し手と聞き手の間に行なわれる face のやり取りを表示し、話し手から聞き手に行なわれる直接的、あるいは間接的な FTA に反発する anti-FTA マーカーとして機能していることを明らかにする。また、談話マーカーとして意味的に同じような働きをする「그래도」を取り上げ、どのような類似点、あるいは相違点があるのかを比較し、「하지만」の独自の機能を明らかにする。

1. 「하지만」の意味と分布

実際の談話において「하지만」は、二つの位置にあらわれる。その一つは、自

分の turn の中に用いられる場合であり、もう一つは、次の話し手として turn をはじめる前の pre-starts として用いられる場合である。今までの文法研究では、前者が取り上げられることが多いが、談話の研究では後者の談話における機能が、face 行為理論、politeness の研究などで注目されている⁽¹⁾。

まず、自分の turn 中に用いられる「하지만」を見てみる。

(1) 어제 저녁에는 열이 있어서 일찍 잤어요. 하지만, 숙제는 다 했어요.

(昨日は熱があつて早く寝ました、でも、宿題は全部やりましたよ。)

(1)のように自分の turn 中に用いられる「하지만」は、前文の内容に関して逆接をあらわし、弁解、あるいは自分の意見を導く働きをしている。しかし、このような「하지만」は、前文と後文を統語的に関連付ける接続詞として用いられるため、文や句から切り離し単独で用いることができない。つまり、この「하지만」は文法的カテゴリーとしての文法・意味機能をもっており、文中でマーカ―としてのみ機能するという条件が満たされないので談話マーカ―として機能していないと言える。

(2) 1A: 난 그와 결혼한 사이가 아니에요.

(私は彼と結婚した仲ではありませんよ。)

2B: 하지만, 지금쯤은 그가 어떤 사람이라는 건 파악했을 거 아니에요.

(でも、今ごろは彼がどんな人物なのかは把握できているはずでしょう。)

(2)のように pre-starts として用いられた「하지만」は、談話の流れの中で話者交代をうながすために用いられ、話題の焦点を自分に集めたり、話題を転換したり、話し手と聞き手の相互間の発話行為の関連を表示する機能を持っている。つまり、「하지만」は相手の意見を一応認めながら、その後続く表現を用いて相手の意見に反発するという連関関係をあらわす談話マーカ―として機能している。

以下の節では、談話マーカ―としての機能をもつ「하지만」を分析対象として取り上げ、それが face 行為という観点から会話参加者の face にどのような機能を果たすのかを考察する。

2. 「하지만」 と Face 行為

談話の流れの中で会話参加者の間に行なわれる face のやり取りは、時々聞き手と話し手の face を脅かす、いわゆる FTA (Face Threatening-Act、以下 FTA とする) としてあらわれる場合がある。このような状況は、特に相手との意見の相違に起因する。もし、談話の中で相手を FTA しなければならない時には、相手に自分の考えに対する同意を求める、あるいは、疑問表現により相手の意見を求める表現をする、また、聞き手を話し手の行為に参加させるという表現から相手の face を脅かす行為を中和しようとする。このような行為を繰り返すことによって、会話参加者がお互いの face を保持し、談話が成立するのである。このように FTA を中和する行為を Brown and Levinson(1987)は politeness ストラテジーと呼び、Meier(1995)は修復行為(repair work)と呼んでいる。

この考え方に従うと、談話の中で用いられる「하지만」は、逆接の接続詞の意味を残しており、Brown and Levinson が主張している politeness ストラテジーとは考えられない。それよりむしろ、相手の主張を一応受け入れながらも、相手に反対する意見を述べる働きを持っているため face を脅かす働きがあると言える。それは、社会的に上位の者に「하지만」を用いることができないことから裏付けることができる。

Face は、会話参加者自身の思っている自分の姿—つまり、自己というものを—を評価し、認めてもらうことによって成立するものである。従って、相手に対して「하지만」と言うと、相手の発言した内容に同意しながらも十分ではないと感じ、疑義をさしはさむことになり、その意味で face を脅かすことになるのである。そこで「하지만」が、相手と意見が相違している時に用いられるとすれば、共通点を作り出すとか、協力関係を成立させるためのマーカーとしての役割を果たすものが、談話中に存在するはずであるという仮定が成り立つ。逆に言えば、そのようなマーカーが存在出来ない時には、「하지만」があらわれないか、他の face を脅かす可能性の少ないものが用いられると予測される⁽²⁾。

また、turn-taking の時に pre-starts として用いられる「하지만」には、相手の意見に対して反発する、つまり、相手の face を危険にさらす働きがあるため、「하지만」を用いた人は、何等かの補償的表現をして、その face を保ってやらなければならないことになる。そのために、文末に「~지 않을까요」、「~말이죠」のような相手の同意を求める表現を用いることによって face の補償を実現すると考えられる。つまり、この表現は談話の主題について同じ意見をもつ側に立つ

ているという確認、あるいは自分の意見を認めて自分の側に立ってもらいたいと連帯を求める働きをしていると言える。このようなことから、「하지만」と一緒にあらわれる「~지 않을까요」、「~말이죠」では、相手に対する FTA をやわらげる mitigator としての役割があると言える。

本稿では pre-starts として用いられる談話マーカ―としての「하지만」が、どのように相手に対する FTA として機能し、どのような手段を用いて FTA を中和しているのかを考察し、談話における「하지만」の意味・用法の特徴を明らかにする。その際、談話の中で相手の意見に反発するという意味合いで同じ働きをするマーカ―として用いられる「그런데」、「그래도」を取り上げ、それらとはどのような相違があるかを考察してみる。

3. Pre-starts としての「하지만」

3.1. 「하지만」の Face-Threatening 機能

「하지만」は直接的に相手の意見に反対する face-threatening マーカ―なので、政治討論のような公的な場や社会関係の中で目上の人には用いることができないと予測される。しかし、談話において「하지만」と同じく pre-starts としてあらわれ、相手の意見との対立を表現し、意味的にほぼ同じ働きをする「그런데」は用いることができる。これは、「그런데」によって表現される曖昧な態度、または「内容に自信がない」などの間接的な態度に、反対や不同意をあらわすことを避けて、相手の face を脅かさないような補償作用、丁寧さが含まれているためである。例を見てみる。

(3) 1A: 그 계획은 양국간에 있어서 매우 중요한 의미를 가지고 있습니다.

(この計画は両国間においてとっても重要な意味を持っています。)

2B: a. *하지만, 실패할 위험성이 많지 않습니까?

(でも、失敗する危険性は高くないですか?)

b. 그런데, (ただ)

一般に「하지만」は「그런데」と置き換えられるが、(3)のような政治討論の場面では「하지만」があらわれない。なぜなら、「하지만」には「그런데」が持っている FTA 機能を感じさせない、あるいは、曖昧性によってやわらげる機能をもたず、むしろ、face を直接におびやかす機能があるからである。

上の例のような政治討論の場面、または公的な場や社会関係で目上の人には、「하지만」は直接にあらわれないが、以下のような表現がその代わりに用いられると考えられる。

그건 그렇겠지만 (それはその通りですが)

지당하다고 생각합니다만 (おっしゃる通りだと思いますが)

반대하는 것은 아니지만 (反対することではないのですが)

말씀하시는 것은 잘 알겠습니다만 (おっしゃることはよくわかりますが)

어떻게 생각하시는지 모르겠지만 (どうお考えなのかはわかりませんが)

これらの表現は、自分の意見を相手に主張する前に一種のクッションを置くことによって、語調をやわらげ、相手に対する FTA をやわらげようとするものである。また、これらは付けても付けなくても、主張の内容が変わるわけではないので、情報的にはまったく余分なものであるが、対人関係や談話の流れを円滑に維持するためには重要な働きをしていると考えられる。つまり、「하지만」の形のままで用いてしまえば、相手の face を直接に脅かすことになるため、同じ意味用法を持っているが、face に中立的な、または丁寧な、すなわち face を脅かさない表現を用いているわけである。

3.2 「하지만」と「그래도」の Face 行為

談話上で pre-starts として用いられる「하지만」と「그래도」は、相手の発話に反発し、自分の意見や感情を伝える点では同じ働きをしている。しかし、「하지만」が anti-FTA マーカーなのに対して、「그래도」はその機能を持たないため、相手に伝えられる face-effects に差が存在すると予測される。それは、相手の face をやわらげるストラテジーとして用いられる mitigator や redress 表現、または「하지만」と「그래도」が用いられる条件を見れば把握することができる。

3.2.1.話し手の意見・意図の表明に対して用いられる場合

談話の参加者たちは、相手との有効な関係を保持しようという意識を持つため、自分の意見や意図を間接的に表明する場合がある。しかし、聞き手は自分の意見が話し手の意見と一致しない時、相手の意見に反発するために「하지만」と「그래도」を用いて、言いたいことを表明する場合がある。

では、「하지만」と「그래도」が、相手からの間接的な FTA に対して、どのように反発するのかを次の例から見てみる。

(4) 1A: 지난 번에 있었던 일 걱정할까봐 말 안 했어.

(この前にあったこと、心配するかと思って言わなかったのよ。)

2B: a. 그래도, 말씀해 주시지 그러셨어요. (でも、話してくれてもいいのに。)

b. 하지만 (でも)

3A: 미안하네. 이해하게나. (ごめん、理解してね。)

(4)の場合、相手の意見に反発するために「하지만」と「그래도」が用いられている。しかし、相手の face を脅かす観点からみるとこの二つには微妙な相違が見られる。両表現は、「~셨어요」のような mitigator を用いて相手の同意を求めながら、face を脅かす危険を避けようとしている点は一致しているが、その両表現を用いるための条件には違いが見られる。この違いは、相手に対して用いられる「하지만」と「그래도」を各々「그러하지만」と「그러하여도」にパラフレーズし、前提となっている意味を考えてみると把握できる。

(4) 2B': a'. (걱정할 지 모른다) 그러하여도, 말씀해 주시지 그러셨어요.

((心配するかも知れない) それにしても、話してくれてよかったのに。)

b'. (걱정한다) 그러하지만, 말씀해 주시지 그러셨어요.

((心配する) だけど、話してくれてよかったのに。)

「그래도」の場合、相手の意見をそのまま確定条件として受け入れず、可能性はあるが確かではないかもしれないという考えで「걱정할 지 모른다」のような条件表現が省略されている。一方、「하지만」は、相手の意見をそのまま確定条件として受け入れ、「걱정한다」という意味機能を持って使われている。つまり、「그래도」は相手からの FTA を間接的に受け入れて反発しているのに対し、「하지만」は相手の FTA を直接的に受け入れ、それに反発する、いわゆる、anti-FTA マーカ―として働いている。そのため、(4)のような発話は、一般的に「하지만」より「그래도」が相手の意見に対して直接的に反発せず、事実をやわらげる働きがあるため用いられると思われる。

また、「하지만」と「그래도」には相手のFTAに反発するだけではなく、続く表現を用いてさらに相手にFTAする場合がある。この時、用いられる続く表現には異なったmitigatorがあらわれると予想される。例を見てみる。

(5) [A: 어머니, J: 정재민]

1A: 그게 무슨 자랑이라고 너한테 말해주겠니? 우린 네가 사관학교에 지원할 줄은 꿈에도 몰랐다. (それが何の得があつてあなたに話すの? われわれはあなたが士官学校に志願するとは夢にも思わなかった。)

2J: a. 그래도, 큰아버지에 관한 일인데 그쯤은 제가 알고 있었어야죠.
(でも、叔父に関する事なので、そのぐらいは知ってたほうがいいでしょう。)

b. 하지만, 큰아버지에 관한 일인데 그쯤은 제가 알고 있었어야 되잖아요.
(でも、叔父に関する事なので、そのぐらいは知っておくべきじゃないですか。)

3A: 너 낳기도 전에 일인데, 우리도 다 잊어버리고 있던 일이야.
(あなたの生まれる前のことなので、我々も全部忘れていたことなの)

(『남사당의 하늘』 1994 : 322)

(5)のように相手からの強い意志の表明によるFTAが存在する場合、「하지만」と「그래도」を用いて相手のFTAに反発することができる。しかし、文末の表現を見てみると、「하지만」と「그래도」を用いることによって相手にあたえるFTAの程度に差がある。これは、両表現に続く表現がさらにFTAを導いていることから把握することができる。つまり、「하지만」の場合は相手に自分自身の強い意図を直接的にあらわす表現が用いられるのに対して、「그래도」の場合は相手に同意を求める、あるいは相手に話題の決定権をあたえるような疑問表現がよく用いられる⁽³⁾。もし、このような場面で「그래도」を使用せず、「하지만」を用いると、相手のFTAに強く反発するとともに、相手の発話行為全体を無視、あるいは否定することになり、言い争いになってしまう恐れがある。次の(6)のような例がそれに相当するものである。

(6) [B: 부인, N: 남편]

1B: 사랑은 순간에만 존재해요. 그 시간이 지나면 갈증만 남을 뿐이죠.

(愛は瞬間だけに存在するのよ。その時間が過ぎれば渴きが残るだけよ。)

2N: 그래도, 한때는 우리가 서로 사랑한 적이 있었다고 난 믿고 싶소. 행복한 순간들도 있었으니까. (でも、一時はわれわれがお互い愛し合ったことがあると私は信じたいよ。幸福な瞬間もあったからね。)

3B: 하지만, 당신을 사랑한 적이 없어요. (でも、あなたを愛したことはないのでよ。)

4N: 당신의 감정까지 속일 것 없소. (あなたの感情までだます必要はない。)

(『남사당의 하늘』 1994 : 250)

(6)は、男女の言い争いの例である。1Bが、2Nに対して「시간이 지나면 갈증만 남을 뿐이다」という否定的な意見を伝えることによって、聞き手は自分のfaceが脅かされたと感じている。そのためそれに対して2Nでは、「시간이 지나면 갈증만 남을지도 모른다」という意味を前提として「그래도」を用いながら、相手に脅かされたfaceを中和しようと試みる。つまり、「그래도」は相手の言った言葉を前提として引き取って用いられており、接続詞として本来持っていた逆接の意味を保持しているために、相手からのFTAに反発しながら、それを中和して受け止めている。そして、続く表現により脅かされると想定される相手のfaceをやわらげるため、文末に「~고 싶소」や「~있었으니까」のような婉曲表現を用いてredress(補償作用)をしながら自分の意見を伝えようとしている。一方、3Bの「하지만」を見てみると、相手からの一方的な意見の押し付けによるFTAに対して「행복한 순간들도 있었다」と一応は認めながらも、「사랑한 적이 없다」という強い否定表現によって、さらに相手のfaceを脅かしている。そこで、脅かした相手のfaceを補償するため、文末に「~어요」というmitigatorを用いてFTAを中和しようとしている⁽⁴⁾。つまり、「하지만」は相手からのFTAに直接的に反発する、いわゆるanti-FTAマーカ―として働いているとともに、さらに相手をFTAする表現を導く働きをしている。それは、続く4Nの発話から把握することができる。つまり、4Nでは「감정까지 속일 것 없다」のように相手のfaceをやわらげるため用いられるmitigatorやredressな表現がされず、直接に反発する内容が用いられていることから、相手のfaceに対する配慮がなされず、FTAを積極的に用いて談話を進めようとしている。politeness理論は、これをimpolite

とも polite とも判断できないため、このような場合は説明できない。

以上のことから、「하지만」と「그래도」はともに相手の意見に反発するため
に用いられるが、これらは相手の FTA に対して anti-FTA を持つか、持たないかで、
使い分けられていることがわかる。つまり、「그래도」の方が「하지만」より、
反発する働きをしながら、相手からの FTA を間接的に受け止め、中和しながら談
話における FTA を進めて行く働きををすると言える。

3.2.2. 話し手からの依頼・誘いに対して用いられる場合

談話の中で、話し手は聞き手に依頼や誘いをする場合がある。それは、相手の
自由意志を妨げる、つまり相手の face を脅かすことになるため、話し手は疑問や
同意を求めるといったストラテジーを用いて、相手に対する FTA をやわらげよう
とする。しかし、そのような方策が取られるにもかかわらず、聞き手は話し手の
発話には FTA が存在するということを知らせるとともに、それに反発する働きを
果たす談話マーカ―を用いることがある。このような働きを持っている談話マー
カーが「하지만」である。つまり、「하지만」は相手からの FTA に反発する anti-FTA
マーカ―として機能するのである。しかし、前節で述べた「그래도」にはそのよ
うな機能がないため、相手からの依頼や誘いを拒否する場合には用いることがで
きない。この節では、なぜこのような談話上の相違があらわれるのかを見てみる。
以下の例から考えてみる。

(7) 1A: 이번 프로젝트 좀 도와주시겠습니까?

(今度のプロジェクトちょっと手伝ってくれませんか?)

2B: a. 하지만, 저희 프로젝트도 아직 끝나지 않았거든요.

(でも、うちのプロジェクトもまだ終わってないので。)

b. *그래도,

c. 그런데,

(7)のような場合、「하지만」は用いることができるが「그래도」は用いること
ができない。これは、「하지만」と「그래도」をパラフレーズして、相手の FTA
をどのように受け入れ、反発しているかを分析して見れば、その相違を把握する
ことができる。

(7) 2B': a' (도와주고 싶다) 그러하지만, 저희 프로젝트도 아직 끝나지 않았거든요.

((手伝いたい) だけど、うちのプロジェクトもまだ終わっていないので。)

b' ϕ *그러하여도, 저희 프로젝트도 아직 끝나지 않았거든요.

(ϕ そうだとしても、うちのプロジェクトもまだ終わっていないので。)

このように「하지만」は、「도와주고 싶다」「식사하고 싶다」という意味を含んでいて、続く内容によって相手からの FTA を拒否し、相手からの誘いや勧誘に従えない理由を述べている。また、「하지만」で脅かされた相手の face をやわらげるために、理由を提示して、同意を求めることで redress する、あるいは、「~것 같은데요。」や「~거든요」などの文末の表現を用いて語調をやわらかくし、同意を求め相手に対する FTA を中和している。しかし、「그래도」は相手の発話に対し、「~かも知れない」という疑問を投げかけることができないため、依頼や誘いを拒否する anti-FTA としての機能を果たすことができないと思われる。このような場合、一般に「하지만」による直接的な anti-FTA より、3.1 節で述べた「그런데」の方が、相手に対する anti-FTA 機能から生じる FTA を感じさせない、あるいは、曖昧性による補償機能を含むため、よく用いられると考えられる。また、イントネーションが mitigator の役割を果たし、相手に対する FTA を中和する機能を持つと予測される。

一方、「하지만」と「그래도」は新しい topic を提示することはできない。次の例から見てみよう。

(8) 1A: 내일 3 시까지 이곳에 모이시오. (明日 3 時まではこちらに集まってください。)

2B: *하지만,

*그래도, 오늘 저녁은 어디서 먹는 거야? (今日の夜はどこで食べるの?)

그런데,

(8)の場合、「하지만」と「그래도」は「그런데」と置き換えることができない。なぜなら、「하지만」と「그래도」は相手の談話中に含まれる FTA に反発し、自分の意見を述べる時に主に使われる。従って、聞き手は文頭に「하지만」、および「그래도」と言われると、今までの情報に対する反対意見を期待するからである。もし、この時に新たな topic を導入すると、状況の適切性が崩れるため異常な会話になってしまう。このような場合に用いられる「그런데」は、談話マーカ一の機能より、談話の流れの中であらたな話題を切り出す、あるいは発話を発話の間をつなぐ働きをしていると思われる。

4. おわりに

本稿では、談話において pre-starts としてあらわれる「하지만」を取り上げ、face 行為という観点から、相手の意見に反発する例を整理して談話における用法について考察した。その結果、次のようなことが明らかになった。

「하지만」は、相手の face を脅かす機能を持つ談話マーカ一であるので、公的な場面や相手が社会的関係において上位の場合には用いることができない。そのため、普段の談話では相手の face を脅かす機能がない「그런데」を「하지만」の代わりに用いている。

「하지만」は相手からの FTA に反発する anti-FTA マーカ一としての働きを果たしているとともに、さらに相手の face を脅かす表現を導く働きがある。そして、「하지만」によって脅かされた相手の face をやわらげるため、その後に相手の同意を求める表現や相手に発話権を渡す表現などを用いて、相手に対する FTA を中和し、談話を自然に維持していくと考えられる。

一方、「하지만」と同様に相手の意見に反発する「그래도」は、anti-FTA 機能を持たず、相手からの FTA を間接的に受け止め、談話における FTA を中和する働きがある。

* 本稿は 1997 年 10 月 5 日に行われた朝鮮学会第 48 回大会での発表をもとにまとめたものである。発表の際に御意見を頂いた聴衆の方々、特に、貴重なコメントを頂いた梅田博之先生にお礼を申し上げたい。

注

(1) 談話マーカ一の機能に関する研究は、筆者の知る限り、韓国語の談話研究ではあまり見当

たらないが、日本語の場合、Onodera (1993)、蓮沼 (1997) などがある。英語の場合、Schiffrin (1987)、Bell (1995) などがある。

- (2) この場合、「그런데」、「근데」のような談話マーカ―が用いられると予想される。
- (3) 文末の表現形式に関して、言語使用者の個人的な好みによる問題が多く作用すると思われる。また、イントネーションは尻上がり調が多く使われる。
- (4) mitigator として用いられる表現は、様々であるが以下のような表現が主なものである。
-거든요 / -지 않습니까 / -했어요 / -더니 / -어요 / -군요 / など、同意を求めたり、
間接話法に用いられる語尾。

参考文献

- 윤대성 (1994) 『윤대성 신작 희곡집 남사당의 하늘』 정우사
- 曹 永湖 (1997) 「談話マーカ―『だって』 : Face 行為理論によるアプローチ」、『日本学報』
第 39、韓国日本学会、pp. 153-167
- 蓮沼 昭子 (1997) 「『だって』と『でも』—取り立てと接続の相関—」、『姫路獨協大学外国
語学部紀要』10 号
- Bell, David (1994) *Cancelative discourse markers*. Ph. D. Dissertation, Georgetown
University. [Published 1994, U.M.I. Michigan]
- Brown, Penelope and Stephen Levinson (1987) *Politeness: Some universals in language
usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fraser, Bruce (1990) Perspectives on politeness, *Journal of Pragmatics* 14, pp. 219-236.
- Buck, R.A. (1997) Towards an extended theory of face action: Analyzing dialogue in E.
M. Forster's *A Passage to India*. *Journal of Pragmatics* 27, pp. 83-106.
- Meier, A.J. (1995) Passages of politeness. *Journal of Pragmatics* 24, pp. 381-392.
- Onodera, Noriko Okada (1993) *Pragmatic change in Japanese: Conjunctions and
interjections as discourse markers*. Ph. D. Dissertation, Georgetown
University. [Published 1994, U.M.I., Michigan]
- Schiffrin, Deborah (1987) *Discourse markers*. Cambridge, England: Cambridge university
press.